
曲目紹介

○ベートーヴェン（1770-1827）

：ヘンデルの『ユダ・マカベウス』「見よ勇者は帰る」の主題による12の変奏曲 WoO. 45

「おっ、これは表彰式の時に流れる音楽ではないか。」とどなたも思われるほど有名な、ヘンデル作曲の旋律が使われています。ベートーヴェンは変奏曲作曲の名人でした。チェロとピアノのための変奏曲についてはベートーヴェンは3作を遺しており、いずれも初期の作品です。あとの2曲は彼が尊敬したモーツァルト作曲のものを主題としておりますが、同様にヘンデルも高く評価しており、ヘンデルへの敬意が表れている一作品です。変奏曲の内の2つ（4番目と8番目）は短調、その他（5, 6, 10番目）はカノン形式が強調され、9番目の変奏曲は主題がハーモニーの輪郭に溶け込んでいるという構造になっています。そして、最後の2つの変奏曲は、飾りの多いアダージョとなっています。

○ベートーヴェン（1770-1827）

：チェロとピアノのためのソナタ（チェロ・ソナタ）第5番 Op. 102-2

ベートーヴェンの5曲のチェロ・ソナタ中、第3番と並んで最も人気がある曲です。第3番は、いわゆる「運命」と後世に名付けられた第5交響曲作曲の頃に作られましたが、この第5番はその7年後の1815年に第4番と並んで作曲されました。この当時、彼は交響曲はすでに第7番・第8番を発表しており、世俗的な人気でも絶頂を極めていましたが、実はこの頃より一転して内省的な深遠な境地へと歩みを進めていきます。いわゆる晩年の『後期』とよばれる作風が、この頃より表われてきます。この第5番は、ベートーヴェンのチェロ・ソナタ中の最高傑作であり、また彼の残した全ての二重奏ソナタ（ヴァイオリン・ソナタなど）の中でも最も円熟した気高い作品に数えられています。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオニ長調 4分の4拍子ソナタ形式

第2楽章 アダージョ・コン・モルト・センチメント・ダフェットニ短調
4分の2拍子三部形式

第3楽章 アレグロ-アレグロ・フガート ニ長調 4分の3拍子 序奏を持つフーガ形式

○ドビュッシー（1862-1918）

：チェロとピアノのためのソナタ（チェロ・ソナタ）ニ短調

1915年の夏、ドビュッシーは様々な楽器の組み合わせによる6曲のソナタを作曲する計画を立てました。それまでに実は、ドビュッシーは室内楽曲をほとんど作曲していなかったのです。唯一、若い頃に作曲した弦楽四重奏曲が一曲あるだけで（大変な名曲です！）、ずっとかえりみなかった分野でもあったのです。その彼に室内楽ソナタのきっかけを与えたのは、1914年の第一次世界大戦だったようです。その頃病魔とも闘いながら彼はこの企画に挑むわけですが、完成出来たのは結局「ヴァイオリン・ソナタ」「フルート、ヴィオラとハープのためのソナタ」、そして「チェロ・ソナタ」の3曲のみ。結果として、彼が亡くなったために残念ながらあとの3曲は作曲されませんでした（「オーボエ・ソナタ」「ホルン・ソナタ」「クラブサン（ハープシコード）・ソナタ」といわれています）。

チェロ・ソナタは、中でも最初に誕生したソナタです。わずか数日で仕上げられましたが、大変な傑作です。彼はこの曲に「月と仲違いしたピエロ」という副題を付けるつもりだったそうです。印象派の音楽家とも称されるドビュッシーの不思議な気分を味わっていただければと思います。

第1楽章 プロローグ 決然としたピアノによる主題の提示で始まりますが、まもなくチェロがメランコリックな旋律をつぶやくように奏します。

第2楽章 セレナード ロマンチックというより、グロテスクといった感じです。チェロのピチカートも、不気味な感じです。しかし随所にみられるチェロの高音域での歌わせ方は、ドビュッシーならではの見事な曲想です。

第3楽章 終曲 第2楽章のセレナーデより続けて演奏されます。それまでの鬱屈した気分が一扫され、時々優しい立ち止まりをみせながら、晴れやかな旋律がのびのびと歌われます。

○小田 侑：無伴奏チェロのための作品（新作初演）

この作品はルネッサンス時代の作曲家ダウランドのルートソング“In Darkness Let Me Dwell”がモチーフになっています。このモチーフの作品を何曲か書作曲して、今回もそのシリーズの一貫になります。すでに現存する曲をなぞって、その縛りがある中で創造の可能性を追求するのがこのシリーズのチャレンジテーマです。縛りと自由という矛盾した環境で創造力を刺激しながら、そもそも作曲と編曲の違いは何かと問いかけるのもこのシリーズを通して目指すところです。（作曲者による）

○メンデルスゾーン（1809－1847）

：無言歌集より「ヴェネツィアの舟歌第2番」Op. 30-6

作曲者自身によって、タイトルが付けられています。1830年に、メンデルスゾーンは初めてイタリアを旅行しました。若きメンデルスゾーンと晩年のゲーテの交流は有名ですが、この旅行も老文豪に勧められてのことでした。

同じタイトルのものが、第1巻第6曲・第5巻第5曲にもみられます。3曲の中では、この第2番が最も有名な作品です。アレグレット・トランキエーロ 嬰へ短調。

○メンデルスゾーン（1809－1847）

：無言歌集より「春の歌」Op. 62-6

『無言歌』とは、「歌詞のない歌曲」のことです。メンデルスゾーンは、手紙の中でしばしば無言歌のことを「ピアノ・リート（歌曲）」と呼んでいたもので、彼が歌曲の様式で書かれたピアノ曲を意図していたことが伺われます。無言歌集は全部で8巻あり各巻には6曲ずつ納められていますので、全部で48曲から成っています。各曲のスタイルは実に様々で、高度な技術を要するものも含まれています。それらの曲の多くにタイトルが付けられていますが、実は作曲者自身がタイトルをつけたものは、「ヴェニス舟歌」や「民謡」などほんの数曲だけで、いわゆる標題音楽を意図したものではありません。この「春の歌」は中でも最も有名な曲であり、最も人気のある曲です。春のシンボルであるハーブの響きが伴奏モチーフとして反映されています。アレグレット・グラツィオーソ イ長調。

○メンデルスゾーン（1809－1847）

：チェロとピアノのためのソナタ（チェロ・ソナタ）第2番 Op. 58

メンデルスゾーンの創作活動の絶頂期である1843年に作曲されたチェロとピアノのための白眉の名作です。メンデルスゾーンは、イタリアのチェロ奏者であるアルフレード・カルロ・ピアッティと親交を結び、チェロの奏法などで多くの助言を受けました。その成果ともいえるのが、このニ長調のソナタです。第1番変ロ長調はシューマンに称賛されましたが、この第2番はそれ以上に豊かな楽想の広がりを持つ意欲作です。初演は1844年に、8回目のイギリス訪問の際に行われました。

第1楽章アレグロ・アッサイ・ヴィヴァーチェ ニ長調 8分の6拍子

個性的なロマンティストの一面が強調されており、気分の激した幻想曲風の音楽です。

第2楽章アレグレット・スケルツァンド ロ短調 4分の2拍子

どこかユーモラスだが、孤独な愁いを含んだ雰囲気もたたえている楽章です。

第3楽章アダージョ ト長調 4分の4拍子

メンデルスゾーンらしい高貴さをたたえたピアノの主題を、チェロが即興風に表情豊かな詠嘆調の歌を奏でていきます。その歌を、ピアノが慰めるように優しく包んでいきます。

第4楽章モルト・アレグロ・エ・ヴィヴァーチェ ニ長調 4分の4拍子

切迫感を秘めた序奏に続いて、躍動感にあふれた華やかな主題がピアノによって提示されます。以後も多彩で、情熱が疾駆するといった趣の展開。初期ロマン派の「時代の気分」に溢れている終楽章です。